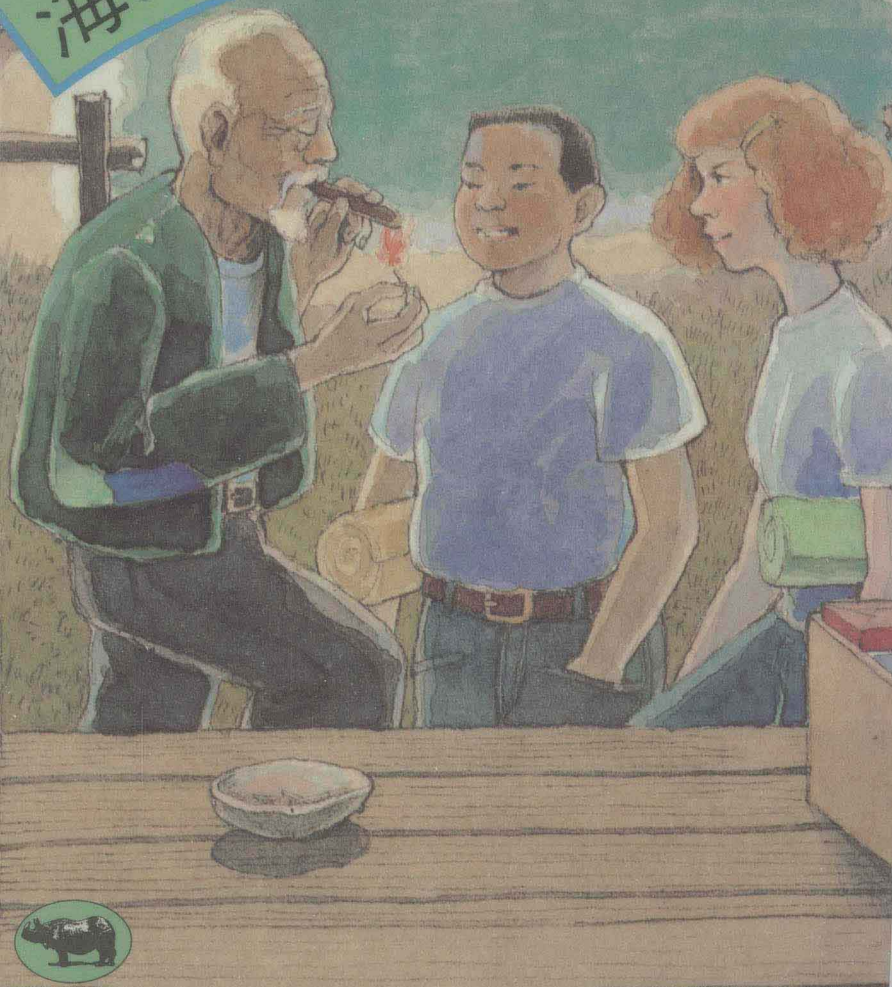


ローレンス・ヤップ 中山容訳

タウン・ブックス

# 海のなかのガラス



ツブ

ンフランシスコ生まれの中国  
家。カリフォルニア大学、ニ  
大学で学ぶ。本書のほか『甘  
』『ドラゴン複製機よ、飛べ』  
、リー児童文学賞受賞』『ふく  
』などの若い世代へ向けた作

ま・よつ)

生まれ。明治学院大学英文科  
スト教大学修士課程修了。現  
学院短大教授。  
ブ』『ドラゴン複製機よ、飛べ』  
『全詩集』(共訳)、J・オカ  
・ボーイ、R・マンゴー  
るには』(以上晶文社)、『ウ  
ロス・ウィリアムズ詩集』(共  
か。

ダウンタウン・ブックス

海のなかのガラス

一九八一年二月一日発行

著者 ローレンス・ヤップ

訳者 中山容

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一—二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六一六二七九九

あづま堂印刷・美行製本

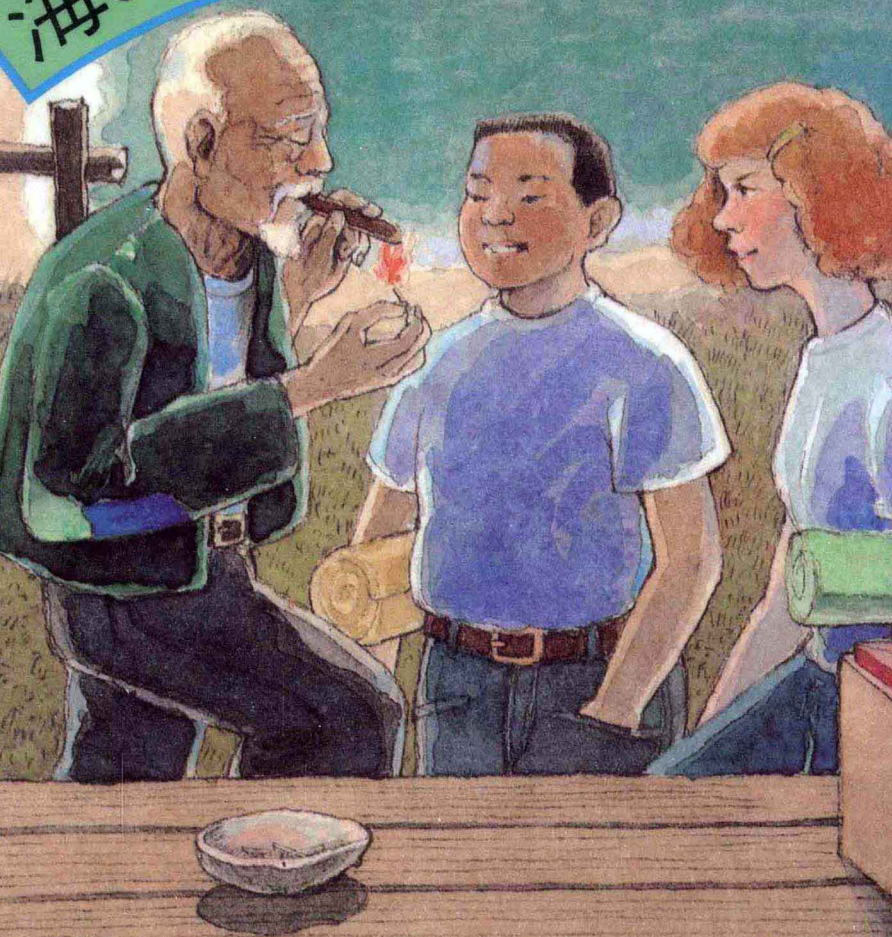
Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)すること  
は、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害  
となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。  
へ横印廃止、落丁・型丁本はお取替えいたします。

ローレンス・ヤップ 中山容訳

ダウンタウン・ブックス

# 海のなかのガラス



### *Have a nice story*

どんな本が好きかって？ そう、ふだんは無口でひかえめな友人のような本がいい。こちらの気分に合わせて、おしゃべりになってもくれるが、決して甲高い声で、スローガンなど、わめきだしたりはしない。孤独にはひたらせてくれるけれど、さりとして、とっぷりつかった孤独に溺れて、死にかけるなんて心配も不要。ユーモアにも欠けていてほしくはないな。クスッと笑って、あたりを見まわし、首をすくめて、おいよせよ、人前だぜ、なんていわねばならぬことも、たまにはあった方がいい。そして、もうひとつ、同時代を呼吸していて……どうだろう。君たちも、そんな本をさがしてみないか。

(なだ いなだ)



# 海のなかのガラス

---

ローレンス・ヤップ 中山容訳

---

ダウントウン・ブックス



晶文社



Laurence Yep :

SEA GLASS

Original Copyright © 1979

by Laurence Yep

Japanese Copyright © 1981

by Shobun-sha Publisher, Tokyo.

Japanese translation rights arranged  
with Laurence Yep

% The Sterling Lord Agency, Inc., New York  
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

海のなかのガラス

ブックデザイン

平野甲賀



登場人物

クレッグ・チン 主人公。デブで不器用な十二歳の中国人少年。

カルビン・チン クレッグの父親。元プロ・バスケットボールの名選手。  
スタンレー クレッグの一つ年上のいとこ。

シーラ スタンレーの妹。クレッグのクラスメート。

ケニヨン クラスメートの白人の女の子。

ブラットリー

ジム } フットボール仲間の白人の男の子。  
ラルフ }

ウズラじいさん 孤独な中国人老人。



# 1

I

「ハッピー・ワン」

ブラドリーは大人になったら戦車になるんじゃないかとおもう。もとい、ブラドリーはもうすでに戦車だ。きっと十八歳になったら、軍隊色のくらい黄緑色でぬりたくられ、鼻づらに大砲をくくりつけられるだろう。

「ハッピー・ツー」

こんな広い芝生でフットボールやるなんておかしい感じだった。サンフランシスコのチャイナタウンだったら、ふつう運動場のテニスコートだったからだ。そこもあいてないときにはバスケットボールのコートでやった。ここに一番似た広さといえば、チャイナタウン住宅計画に入っている二十フィート幅三十フィートの長さの雑草地しかなかった。もっともノース・ビーチまでいけば、ワシントン広場が使えた。でもあそこだと、よくイタリア系の子とけんかになった。

「ハップ・スリー」

イタリア系の子、白人の子、黒人の子、ブラドリーみたいな子。ここコンセプションではぼくのほか、中国系の男の子はいとこのスタンレーだけだった。スタンレーはぼくよりひとつ上だった。ほかはみんなアメリカ人で、さらに大きかった。ブラドリーが一番の年長だった。

「ハイク」

セクターがボールをスナップすると、ぼくは一気にブラドリーの腹めがけて左肩と腕をぶつけた。ソファの背あてクッションぐらいでつかくて、かっこうまで似ていたので、きつとやわからいだろうとおもったが、実際は戦車の正面みたいにコチンコチンだった。ぼくは土ぼこりに足をつつこんで、蹴りあげようとした。でも戦車をおしかえそうとしてみたいに動かなかった。ブラドリーがニュートラルからギアを入れた。ぼくは草の上をズルズルとすべった。ギアがセカンドに入った。ぼくはバランスをくずし、あやうく倒れそうになって、一歩さがった。それでもからだをねじってブロックしようとした。腕を脇にあて、相手の脚に攻撃をかけようとした。そ

のときすでにブラドリーはフルスピードになっていた。まるで前進してくる戦車にむかつてぶつかるのとおなじだ。ぼくは軽すぎて、仰向けにひっくりかえった。

アッというまに、キングサイズのスニーカーがズバリぼくの顔の上にきた。靴底のケズ・マークがみえた。一瞬、ブラドリーのサイズ十二のスニーカーがこの世の見納めかとおもった。ぼくは腕をあげた。ブラドリーの足がひじの上からギュウと顔にせまった。

ぼくは腹ばいのままころがり、なんとか立ちあがろうとした。そのとき、ブラドリーがクォーターバックのジムにつかみかかるのがみえた。タッチ・フットボールだったおかげでジムは助かった。そうでなかったらブラドリーはかんたんにやつをバラしてたにちがいない。ブラドリーは熊のようにジムに組みつき、ちょっとふりまわしただけだった。

ぼくはゆっくり芝生から起きた。ズボンのひざにはあざやかなグリーンのしみがついていた。もうやめたくなってしまった。でもとうさんががっかりするだろうな。ぼくはひとりごとをいった。

だって、ぼくはとうさんと約束したんだ。シスコからここへ移ってきたのはクリスマスの前の日だった。ぼくたち三人はレスターおじさんの時代物のピックアップ・トラックの運転台にすわっていた。とうさんが運転し、ぼくがまん中には生まれ、かあさんとなりにいた。かあさんは窓からひっきりなしに身をのりだし、うしろにむすびつけたものを気にしていた。

やがて、コンセプトの入口の山のところまできたら、ロックミュージックをやっていたラジオがまるっきりこえなくなった。ウンともスーともいわなくなってしまった。あれこれダイヤルをいじりまわしたが、きこえるのは『リコチェット・ロマンス』みたいなヒット曲しかやらない放送局だけだった。おもしろくないのでスイッチをきってしまった。

「チエ、なんにもやってないや」

「ロックはなしか？ けっこうけっこう。これでおまえの耳もすこしはよくなるな」ととうさんがいった。ロックミュージックは、とうさんがぜったい認めないアメリカ的なものだった。

「だけどぼくは好きなんだ」とぼくは肩をすぼめた。

ハイウェイが一直線にのびているところで、とうさんはぼくをチラリとみた。「わたしたちは西洋人がいるところへいくんだ、いいな」といった。西洋人というのは、とうさんやかあさんがアメリカの白人のことをおだやかにいうときの中国式のよび方だ。「あんな騒音ばかり一日中きいてちゃだめだ。外にでてほかの子とおなじようにやれるってみせなけりやだめだ」とうさんはトラックのハンドルを切った。「これだけはおぼえておくんだ、クレグ。中国人は西洋人の二倍がんばらなくちゃあだめだ。おまえもおなじだ。二倍プレーし、二倍なかよくしなければいけない。でなければ、ただのむつつり中国人のF・O・Bになっちゃうぞ」

「F・O・B？」

「『船からおりたばかり』ってことだよ」

「でもぼくここで生まれたんだよ。かあさんだってそうだし、とうさんだって、うんと小さいときからこの国に住んでるじゃあないか。おじいちゃんだってそうだったんだろう？」

「そんなことは関係ないんだよ。たとえばおまえが、まだきて一年もたつてないフランス生まれの白人の子とならぶとするな、そうすれば、その子はアメリカ人ってよばれても、おまえは外国人っていわれる。連中の二倍もがんばってはじめて、おまえもアメリカ人だってみとめてもらえらんだ。さもなければ、いつまでも手に負えない、トンマなチャンコロさ」

「わたしはね」 かあさんがゆっくり、気をつかいながら口をはさんだ。「クレッグならうまくやれるとおもうわ」

「そうじゃあない」 とうさんはキッパリいった。「クレッグ、おまえはガムシヤラにプレーするんだ。勉強もガムシヤラにやらなきゃあだめだ」

ぼくはとうさんをみつめた。「『ガムシヤラ』ってどういうこと？」

とうさんは片手をハンドルからはなして、空中でなにかをサツとつかみ、ギュッとにぎりしめるかっこうをした。「『ガムシヤラ』とはな、胸が痛むくらいやることさ」

ぼくがそんなにほしいものはないっていいかけるとかあさんがひじでつついた。とうさんが生き方の話をはじめたら、口をはさんではいけない。そういうことになっていた。どんなにおかしいとおもってもだ。だから、ぼくはさからわなかった。そのかわり窓の外をにらみつけ、「ガムシヤラなんて、ふとりすぎだからむりだよ」とぼくはいった。



とうさんにいわれるまでもなく、自分からほかの子ともとうまくやるようにしてはいけなかったんだ。ぼくはよろめきながらクォーターバックのほうへもどった。クォーターバックはあどすさりしながら、まわりをみわたした。「あいにくつついてたのはだれだ」といった。

ぼくは手をあげた。「ぼくだよ。ごめん」 「ごめんじゃあすまないぜ」 もうひとりの子に「ラルフ、おまえがブラドリーにくつつけ」と命じた。

いとこのスタンレーはハドルにもどっていた。スタンレーはすばやいので、いつもエンドだった。「おれ責任ないぜ。あれはまちがいなく六ポイントだ、ジム」と手をひろげた。

ジムはちょっと芝生をしらべ、下をむいたまま、低い声でいった。「さて、もういちどやろうか」それから急に顔をあげると、まっすぐぼくのほうをむいた。「こんどはちゃんと守ってくれよ」と声をかけた。

二度目のライン・アップでは、ラルフがブラドリーとむかいあった。ブラドリーのほうは、ベつのラッシャーとポジションをかえた。それでもぼくを、というよりは、ぼくのうしろをにらんでいた。ぼくは、すどおしのガラスみたいで、まっすぐクォーターバックをにらんでいた。かわいそうなジム。ぼくは頭をあげたまま、ブラドリーの腹めがけて突進した。でもブラドリーは大きな手でぼくのシャツをつかみ、サイドへほうりなげた。ぼくはトリッピングしたが、横つらをつよくパチンとやられてしまった。とにかく、フェアはフェアだった。

ハドルにもどると、ジムは膝をついて、手で脇腹をさすっていた。「チクショー、ブラドリーにやられちゃった。おまえたちどうして守ってくれないんだ」

センターが肩をすぼめた。「おれタックルしたぜ」

「おれだつてしたさ」ラルフがいいはった。

「どうやらぼくらしい」ともうしわけなさそうに、ぼくはみんなをみた。

ジムはぼくを無視した。なにかいわれるよりも、その方がもつとわるかった。文句をいうほどの値打ちもないってことだ。そのときジムはニヤリと笑った。「こんどは奇襲でいこうぜ」ジムはぼくの方をあごでしゃくった。

「あいつにボールをわたすんだ」

「名前はクレッグだよ」

「わかった。じゃあ、おまえがでるんだ、いいな」——ジムは芝生に横に直線をひき、それから左の方向へ手をうごかした——「で、おまえはセンターへにげる——」

「ぼくキャッチできないよ」とぼくはいった。

スタンレーは困りはてたように、空をあおいだ。それからジムのほうをみて、「そいつのいうとおりさ。サンフランシスコへいったとき、練習してたから、よく知ってるんだ」

スタンレーはぼくより一歳年上だった。コンセプションへくるまで、スタンレーと、その妹のシーラのことで知ってることといえば、ふたりとも、ぼくには頭痛の種だつてことぐらいだった。